

本作は上海アリス幻樂団様より発売されている東方シリーズ関連作品の設定を使用した東方風神録にたぶん関連する二次創作物です。

作品の内容に関しては、全て神原傘個人の主観的な解釈による世界観であることをここに記します。ダブルスポイラーの登場で文×栂の危機が訪れましたが二次創作という言葉で盾に居直ることにしました。

わりと戦います。加えて溢れるほどシリーズたつぷりですので、牛乳をかけないとお召し上がりになれないという方はご注意ください。紙に牛乳をかけるとえらいことになりますよ。においと。



この郷に

錦<sup>にしき</sup>の

紅<sup>べに</sup>と

白あれば

想い患う

黒<sup>くろ</sup>鴉<sup>がらす</sup>の

鯉

## ／射命丸文

「この絵、あなたが描いたの？」

文がそう尋ねたとき、青年は既に死に体だった。

どうやら幻想郷に迷い込んだ挙句に妖怪の山に入っており、何か山頂まで登りつめ、そこからの眺望に夢中になるあまり足を踏み外して崖から転落したようだ。破れた鞆から幾つかのフィルムケースと幾葉かの写真が零れ落ち、崖のあちこちに引っ掛かっていた。

最期くらい看取ってやろう。気まぐれにそう思い、青年の傍に降り立った文が目にしたものは、人間業とは思えないほど精巧な絵だった。

鼻と口と腹から血を流した青年は屈託なく笑い、それは写真というものだと言った。

文は感心し、滝の一瞬を撮影した一葉の写真をまじまじと見る。しぶきの一つ一つが鮮明に捉えられており、不思議な感動を文に与えた。

「……凄いのね。まるで世界を切り取ったみたい」

そうとも、と青年は誇らしげに頷き、傷だらけの一眼レフカメラを差し出す。一般に販売され始めたばかりの非常に高価なものであり、奇跡的に撮影機能を保っていた。

「悪いけど、それを受け取ってもわたしはあなたを治してあげることには出来ないわ。もう、手

遅れだもの」

そうじゃないと青年は首を振り、よければ使ってくれないか、と言った。仕方なく受け取った文は、困惑顔でカメラを眺め回す。

「使い方が分からないわ」

文がそう言うとき青年は笑い、血を吐いた。もう目も見えていなかった。

急速に暗化していく意識の中、青年は文に一言だけ教え、静かに息を引き取った。

文はその場に青年を埋葬し、簡素な墓標を建てた。

文の肩には傷だらけのカメラが掛けられていた。

千分の一秒を支配すれば、世界を手中に収められる。

そう言った瞬間の青年の表情は、とても綺麗だった。

その瞬間を残せなかったことを文は後悔した。

## ／犬走椋

パン、という破裂音で目が覚めた。

「ふあ……うん」

樹上にあぐらをかいたまま、射命丸文は大きく伸びをして肩と背筋の凝りをほぐす。寝ている間に少しずれた頭巾の位置を元に戻しつつ押さえ、そのまま首を曲げて骨を鳴らす。

魔法の森の北部には巨大なニレの樹がある。樹高はゆうに三十メートルを超え、樹齢は数千年を数えようかという老樹だ。名はないが、しばしば『果てしなく前から立っている大木』と呼ばれている。

たまの休日に、文はこの樹の上で昼寝をしている。なお、この大木を住処としていた光の三妖精とは大卵の一件以来の顔見知りだ。昼寝に際しても断りを入れてある。

「ふあーあ……」

目をこすつてもう一度大きくあくびをする。目が陽光に慣れると、照葉樹林の枯れた林冠が鮮やかに眼前に広がる。

秋も深まる神無月の末。既に木々は色を失い、冬に向けた準備に取り掛かっている。とはいえ一昨日の雨のおかげで空は抜けるように高く、まだまだ秋めいている。

「あややや……」

森の中心から煙が細く立ち昇っている。また霧雨魔理沙が実験に失敗したのだろう。他人に被害を及ぼさないのはいいことだ。ついでにそのまま永久に閉じこもっているのなら言うことはないのだが。

迷惑が服を着て飛び回っているような存在である魔理沙のことを、大抵の天狗は嫌っている。そのため、魔理沙の居宅がある魔法の森に天狗は近付こうとしない。

誰にも邪魔されずに休日をごすには丁度いい場所だ。組織に属する緊張感が好きだが、肩の力を抜きたくなることもある。

「さて……うん？」

もう一眠りしようかと思った矢先に背後からの気配を感じて首を傾げる。文の知る限り、幻想郷で光遁を借りる者は一人しかいないが、彼女が山に用事とは珍しいこともあるものだ。

「はあい、お元氣？」

眼前でくると一回転して現われたのはやはりサニーミルクだった。ひらひらした紅白の服と白い薄翅が日光に反射して少し眩しい。

「あら、やっぱりサニーじゃない。山に何か用だったの？」

「うん。谷の河童に協力を頼まれてたの。もう終わったけど」

「ほほう、それは聞き捨てなりませんね」

文の嗅覚が働く。河童の新作に光の三妖精が関わっているとは初耳だった。河童は開発途中の品を外部へ漏らしたがない癖があり、なかなか新作の情報を掴むことができないというのが実情だ。

「わたしは詳しいことを言っちゃいけないの。約束は守らないとね」

「まったく、河童の秘密主義にも困ったものね」

「そう？ 相手にばれないように仕掛けるからいたずらは面白いのよ」

それはそうだが、ハイそうですねと言って引き下がってはいは新聞記者の名折れ。どうにか話を引き出せないものかと情に訴える作戦に出ることにする。

「常連のよしみでどうか教えてもらえないものですかね。向こう一年、我が文々ぶんぶんまるしんぶん新聞の購読料を二割引き、いや、半額にしますから」

情どころか金にものを言わせる作戦だった。

「新聞を取っているのはわたしじゃないもん」

あえなく撃墜。そう言われてしまつては返す言葉がない。

「それじゃ、わたしは帰るね。ルナとスターはもう冬ごもりしてるから早く帰りたいの」

「あれ、じゃあなんでここに寄つたの？」

三妖精は現在、博麗神社の境内端にある巨大なミズナラの木を住処にしているはずだ。この大木に寄る理由はない。



「まっすぐ帰ると良くないことが起きる気がしたから。寄り道するなら古巣かな、と思って」  
「はあ、さいですか」

妖精はわりと感性で生きている。三妖精の中では一番理知的なサニーだが、こういうところは普通の妖精と変わらない。

もつとも、彼女らの勘は往々にして当たるのだが。

サニーは文の眼前でくると前転。再び光遁を借りて飛び去った。

手持ち無沙汰になった文は今度こそ二度寝しようと、尻と背をもぞもぞと動かしておさまりのいい場所を探す。

「ふうい……」

あくびをして目を閉じる。陽光に透かされ、目蓋まぶたの裏が赤い。

鼻先に当たった日の光を嗅ぎ、そういえば布団を干しておけばよかったとぼんやり考える。何にせよ、二度寝日和の小春日和。

いい夢が見られそうだ。

「文さま」

「うひっ!？」

急に脇腹のあたりから声が聞こえ、奇妙な声とともに飛び上がる。枯れた葉を破り、白狼天はくろうてんの犬走いぬばしり棍こんが頭だけを出していた。白い髪の毛に、褐色のニレの葉が一枚くつついている。

「なんだ椛か。驚かさないでよ」

「す、すみません」

椛はしよげかえって木の葉に埋もれてしまった。白狼というよりは臆病な子犬だ。

髪についた葉をそと取り去ってやり、用件を尋ねる。

「怒ってない怒ってない。それで、どうしたの？」

頻繁に報道部に出入りし、文の行動を細かに知っている椛のことだ。おおかた誰かに用事を言い付けられたのだろう。そうでなければ椛が文の休息を邪魔するはずがない。

「あ、はい。天魔てんまさまがお呼びです」

「なんでまた……あ、ごめん、続けて」

あからさまに不機嫌な顔をしてしまった。再び申し訳なさそうな顔をする椛を見て焦り、笑顔を取り繕って続きを促す。

「最近、山の妖怪が二匹食われたことはご存知ですよ」

「ああ、あれね」

確か、山犬やまいぬの主と岩の付喪神つくもがみだっただろうか。岩も食うとはなかなかの悪食だが、大して面

白くもなさそうなので報道部の同僚に任せることにした事件だ。

「三匹目が出たんです」

そう言っていると椛は声を潜め、表情を硬くする。

「……それも、今回は天狗が食われました」

「なんですって？」

文が幻想郷に住み着いてから千年。天狗が食われた話など聞いたことがない。

「どこの命知らずだろうね」

幻想郷で天狗に喧嘩を売るのは、鬼に喧嘩を売ることの次に愚かしい行為だ。むしろ間意識が他の妖怪にも増して強い分、報復は執拗を極める。性質の悪さは殴って済ませる鬼の比ではない。

「それでもう天魔さまがカンカンなんですよー」

柊は今にも泣き出しそうだ。あの癪癪持ちが怒りに任せて暴れれば、柊のような下っ端では場にいることすら堪えがたいに違いない。

「仕方ないね……行ってくるよ」

高下駄を履いたまま樹上で器用に立ち上がる。コキコキと首を鳴らして飛ばうとしたその時、柊がそわそわと何か言いたげにしていることに気付く。

「ん、まだ何かあるの？」

「……その、見つからなかったフリをしたほうがよかったでしょう？」

柊の見当外れな気遣いがおかしくて笑ってしまった。

「馬鹿ね、そんなことしたら柊が怒られるじゃない」

おでこを人差し指でとんと突いてたしなめる。

きよとんとしている枕に笑顔で手を振り、文は風を蹴った。瞬時に音速近くにまで加速し、ぐいぐいと遠ざかっていく。ざあ、と少し遅れて枯れた木の葉が揺れた。

「文さま……」

鷹よりよく見える枕の目は、既に針の穴のように小さくなった文の姿を未だに捉えている。突付かれた額にそっと触れ、枕は頬を赤くして呟く。

「下着、見えてます」